

論文の内容の要旨

論文題目： 現代日本語の「ハズダ」に関する考察
－「知識確認形式」という観点から－

氏 名： 朴 天弘（パク チョンホン）

本論文は、以下のことを明らかにすることを目的とした。

第一、「ハズダ」を本質的な意味・機能から、統一的な説明ができるようにすること。

第二、「ハズダ」と似ている意味を持っている他の形式との比較から「ハズダ」の機能を明らかに示すこと

第三、類型論的な観点から「ハズダ」と韓国語の「-(u)l kesita」との対照を行うことで、他の言語との分析する際の有効性を確認すること

第1章では、本論文の背景と目的の他、考察対象について述べている。本論文の目的は、現代日本語の文末に現れる「ハズダ」文について、「ハズダ」の様々な用法を統一的な説明することにより、「ハズダ」の基本的な意味・機能を明らかにして「ハズダ」の全体像を一つの機能から説明ができることを示すことや、韓国語「-(u)l kesita」の他言語の類型論的な観点における有効性を試みることにする。

2章では、「ハズダ」の意味・用法を中心にする記述的に考察したものと、推論の観点から考察したもの、という2つに分けて検討し、それぞれ①「ハズダ」の使用について統一的な説

明ができないという点と、それがゆえに②「ハズダ」の本来の性質を的確に説明できないという問題点を指摘した。

3章では、先行研究の問題点を克服するために、「ハズダ」とは、現実との食い違いがある場合とない場合を別々に述べてきたものを、「話し手の認識的なズレ」という文脈的条件をプロトタイプとして条件付け、「知識の確認」の機能が「ハズダ」の使用における基本的な機能であると仮説を立てた。

4章では、「ハズダ」の使用には、知識を確認するのが主な機能であると仮説を立てて、推論過程を含む未確認領域の事態に対する「ハズダ」の意味・機能について述べた。

推論を伴う「知識の確認」の場合には、推論過程が含まれていることから、使用条件となる「疑問」を生じさせる何らかの対立事項の存在が弱まる場合もある。未確認領域における「ハズダ」の知識の確認には、不確定のものであることから、ズレなどが明確に現れないのが使用条件として働いているが、「ハズダ」の知識確認の過程には当該の事態に対する何らかの疑問がないと「ハズダ」は使いにくく、その疑問が強く意識されればされるほど「ハズダ」は使いやすくなることで、その疑問に対するズレも度合いは存在すると思われる。これらの知識確認には、純粹に話し手の知識の範囲だけでは言い切れない場合が多く、推論過程を伴うわけであるが、そして、疑問を解消すると同時に、話し手の知識には存在しない例外的なことを排除することにつながると考えられる。

5章では、推論を伴わない「ハズダ」の知識の確認について検証をした。知識そのものの確認という特徴から、単なる記憶のことが根拠として使われるだけに見えるが、「ハズダ」が使われることは、知識そのものの真偽が問われ、確認の作業が行われることは、話し手が保持している知識との何らかの認識的なズレが強く感じられるときが特徴的である。これには、①認識的なズレの度合いはあるものの知識(α)と現実や話し手の内部で疑問を持たせるようなズレ(α')が対立事項として存在する場合、②話し手の予想・期待との現実とのズレから生じる場合における知識の確認($\alpha \rightarrow \neg\beta$)もあれば、③反事実的な内容を述べるときの知識の確認(α 対 $\neg\alpha$)が挙げられる。このような推論を伴わない話し手の確認領域に属する事態が話し手にとって何らかの疑問を持つ際に、「ハズダ」は関連する知識の中で一番正当であると知識を確認することから、それが自分の中にあることを強く意識する知識の確認の形式であると言える。そして、「ハズダ」とは、他の概言の形式と違って話し手が持っている知識から生じる疑問を払拭するための、話し手なりの知識の検証の過程を表すということから、反事実的な意味を表すこともできる。認識的なズレから生じる話し手が抱く疑問に対して、話し手自身が自問自答するという機能を果たしていることが確認できた。推論を伴うか伴わないかは、曖昧なところもあ

る。しかし、推論を伴うか伴わないかは、「ハズダ」の本質ではない。疑問を払拭するための知識確認が、当該の知識だけが問われる場合ならば、推論を伴わなくてもいい。しかし、疑問を払拭するための知識確認が、当該の知識だけではなく、未確認領域に属する事態まで投影する必要がある場合は、推論を伴う知識確認が行われるわけである。

6章では、知識確認からの派生的な機能として穴埋めとしての知識の確認や「ハズダ」の否定形、さらに語用論的な hedge としての使用について述べている。このような知識の確認は、話し手が抱く疑問といった穴を埋めるための答えを見つけるために行われる確認として働くか、あるいは、あえてそのような知識の存在すら話し手の中に存在しないことを述べることから可能性を除去する場合もあれば、逆にあえて知識を確認するように述べることから、話し手の主観的な判断であるよりは、知識の領域に属することを表にして、話し手の色を消す責任回避といった hedge としての用法にまでつながることもある。

7章では、「ハズダ」の性質を明確にするために、「ハズダ」と類似している「ダロウ」や「ニチガイナイ」との対照することで話し手の知識の運用においていかなる違いが見られるかを確認し、現代日本語における「ハズダ」の位置付けを考えた。「ダロウ」は「ハズダ」と違って、「ダロウ」は話し手が持っている知識を意識するものの、その真偽を問わず、保留する形式であること、「ニチガイナイ」は、確信度からみて低い判断を表す「ダロウ」に比べて、「ハズダ」と共に確信的な話し手の判断を表す面から共通点が見られる。「ハズダ」が知識の確認を表すことから様々な機能を持っているのに対して「ダロウ」と「ニチガイナイ」にはできないことを確認した。

8章では、「ハズダ」の似ている意味を持つ他の言語との対照を行い、特に韓国語の「-(u)l kesita」を中心に類似点・相違点を確認することで「知識の確認」という「ハズダ」の本質的な機能を再確認すると同時に、言語別の知識の運用に関する全体像が窺えることを目的とした。

「ダロウ」を含めて韓国語には「-(u)l kesita」の似ている意味を表す形式があることから、他言語との対照を行った結果、日本語の「ハズダ」は知識確認という機能を持っているのに対して、韓国語の「-(u)l kesita」は、知識を確認する機能はなく、すでに話し手が保持している知識やつもりなどを、未確認領域に投影させることで、それが「実現する」と判断したり、これから「実現する」と話し手の意図を表したりする意味に発展していることが分かった。さらに、日本語では「ハズダ」と「ダロウ」が、「直接証拠の制限」という制約を受ける知識を基盤とする形式であるのに対して、韓国語には「-(u)l kesita」がその機能を担っていることが説明できた。日本語の場合は、「知識の確認」と「判断保留」という2つの観点から確信の度合いにも関わってくるのに対して、韓国語の「-(u)l kesita」は文脈によって確信の度合いが決まるという

ことが確認できた。韓国語の「-(u)l kesita」は知識を使って未確認領域に投影するモダリティ形式だと考えられるが、日本語の場合は、確信の度合いから「ハズダ」と「ダロウ」が使い分けられている。これは、日本語と韓国語におけるモダリティの体型が異なっていることを示唆する。以上、多言語の分析の一つの方略として、いろいろな特徴を異なった観点から分析をするよりは、一つの統一的な観点からの分析ができたと考えられる。

9章では、結論として、日本語の「ハズダ」とは、話し手が持っている知識を自分が持っていることを強く意識し、有効であることを確認する「知識確認」を表すのが、基本的な機能であると主張した。話し手が疑問に思うことを払拭するために、一番適切であり、関連のある知識を引き出し、確認することであることが、「ハズダ」の本質的な機能であり、「ハズダ」の様々な用法の統一的な説明ができたと考えられる。

本稿では、「ハズダ」をモダリティの観点からは考察していないが、今後、日本語のモダリティ研究に「ハズダ」の位置付けという疑問を投げかけると同時に、多言語における話し手の知識を使う形式の考察と、モダリティ形式としての位置づけを考察するのを課題としたい。